

# 昭和38年度平城宮発掘調査概報

歴史  
建造物  
研究室

昭和38年度におこなった特別史跡「平城宮跡」の発掘調査は、第12・13・14・15・16次の5回にわたり、発掘総面積は211アールにおよんだ。第12次調査は、7月9日から9月26日まで、発掘調査事務所の西南方、第二次内裏中心部(6AAQ-C・D地区)にあたる20アールを発掘した。第13次調査は、8月2日から10月9日まで、通称一条通北側佐紀町南部(6AAO-F・H・I・K・V地区、6AAO-C・D地区および6AAB-U地区)の50アールを発掘した。第14次調査は、宮域南西隅(6ADH-F・I・J・K・L地区)55アールを12月7日から3月31日まで、第15次調査は、西面南門の周辺(6ADF-T・R・P地区)46アールを2月21日から3月31日まで発掘調査した。以下、調査結果の概要を報告する。

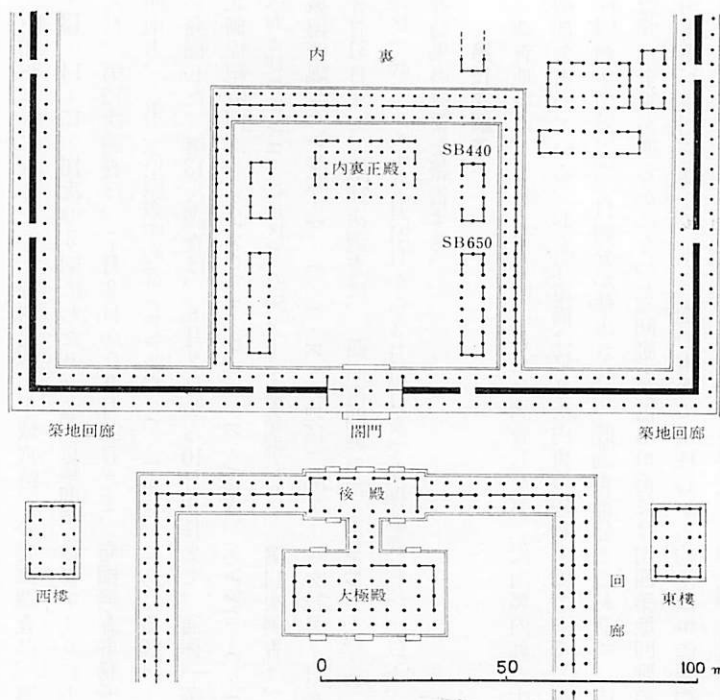
## 第12次調査

調査地域は、これまで3回にわたり調査した第二次内裏内郭の中央南部を占めている。おもな遺構は第2次内裏の建物と廊である。掘立柱回廊SC247は、11間分が検出され、既調査部分と合わせて、内側22間の全貌が明らかになった。回廊の約2.7m南には南面築地回廊の北雨落溝が東西に通っている。廊の東西には柱心から約2.1mに幅約40cmの素掘の雨落溝がある。この廊の西5.9mで、9間2間(柱間:5.5m

等間)の南北棟掘立柱建物SB650を発見した。この建物は第6次調査で発見したSB440と8.85mをおいて桁行柱列をそろえて南北に並んでいる。南面築地回廊の北雨落溝は内裏中軸線から東へ約43m発掘したが、残存状況は極めて悪く、SC247の接合部付近に溝石が残存する程度であった。しかし、凝灰岩の散乱する雨落溝の痕跡は中軸線付近でも一直線に通っており、内裏南面築地回廊の基壇は



第1図 第6・9・12次調査地域



第2図 内裏大極殿一郭復原図

閤門の位置でも張出しはなく、閤門の幅は築地回廊の幅と一致していると考えられる。

第二次内裏に属する建物を平安宮内裏と比較すると、SB440・650は宜陽殿、春興殿にあたるものだが、桁行が宜陽殿9間、春興殿が7間であるのに対し、SB440が9間、SB650が6間となっている。第

2次内裏以外の遺構として冊が2列ある。

### 第13次調査

第13次調査は、東地区(6AAB-U区、6AAO-C・D区)と西地区(6AAO-F・H・I・K・V区)におこなった。

#### △東地区▽

主な遺構は、建物11棟、築地1面、井戸1箇所、溝2条、土境2箇所である。建物のほとんどは掘立柱のものであるが、SB875の小建物は小礎石をすえたものである。6AAB-U地区一帯は地山が東に傾斜して下り、それを埋めて造営が行なわれていた。遺構は配置状況や柱穴の重複関係から少くとも次の5期に区分しうる。

**A期** 6AAB-U地区中央北辺で、東西棟桁行7間(柱間3m)建物SB795の一部を検出したのみである。

**B期** 建物3棟、築地1面が整然と配置されている。U地区の東北部に、南北棟6間以上×4間(柱間各3m)東西両廂付建物SB730がある。この建物の東側柱列の南延長線上に東妻を置いて、東西棟桁行7間(柱間2.6m)の建物SB710(梁間未確認)がある。その約6.5m西に東西棟3間×2間(柱間各2.4m)の建物SB808がある。この南側柱列とSB710の北側柱列とは同一線上にある。U地区東端には築地SC705が南北に通っており、築地の東側は一段低くなっている。築地は整地層を約50cm掘りさげ、その上に黄褐色粘土を積み上げた基礎地固めを残すのみで、東縁は水田造成時に破壊され、現存の築地基礎地固めの最大幅は6mである。U地区西北隅の土境SK820はこの期に属し、出土した木簡から埋没時を天平末年に推定できる。

**C期** SK820埋土上に造営された南北棟6間×3間(柱間各3m)

東廂付建物 S B 818 と、その南 10 m に西側柱列をそろえて、南北棟 2 間以上 × 2 間（柱間各 3 m）の建物 S B 805 がある。この建物には床東柱穴がある。6 A A O—D 地区の北部にある 3 間 × 2 間（柱間各 3 m）S B 875（a）の期のものである。

**D 期** U 地区の中央部西よりに東西棟 5 間 × 3 間（柱間各 3.4 m）北廂付建物 S B 775 がある。

**E 期** U 地区の中央北よりに東西棟 6 間 × 4 間（柱間各 4 m）四面廂付建物 S B 780 がある。井戸 S E 715 もこの期に属する。

以上の 5 期のほかに時期を決しがたい建物が数棟ある。なお、D 地区のほぼ全域は市庭古墳（S X 500）の前方部東側の周濠部分にあたり一部にトレンチを入れて玉石を敷きつめた外堤東岸を検出した。

△西地区▽

今回新たに検出した主な遺構は、建物 11 棟、柵 1 列、井戸 1 個所などで、第 2 次内裏北面築地回廊 S C 060、その北の築地 S C 488 などの東延長部も前年度にひきつづき検出した。この地区の南半は市庭古墳前方部前面の周濠にあたり、平城宮造営時に埋没し、その上に建物を造営している。新たに検出された建物はすべて掘立柱のもので、配置状況や柱穴の重複関係から次の 6 期に区分しうる。

**a 期** F 地区と K 地区にまたがった南北棟 5 間 × 2 間（柱間各 4 m）の建物 S B 1080 がある。他に遺構はない。

**b 期** K 地区の中央部にある東西棟 5 間以上 × 5 間（柱間各 3 m）の建物 S B 1000 は身舎の梁行が 3 間のもので、西端は未調査だがおそらく四面廂になるものとみられ、6 A A O 区で最大の規模のものである。

る。その 6.5 m 北にある東

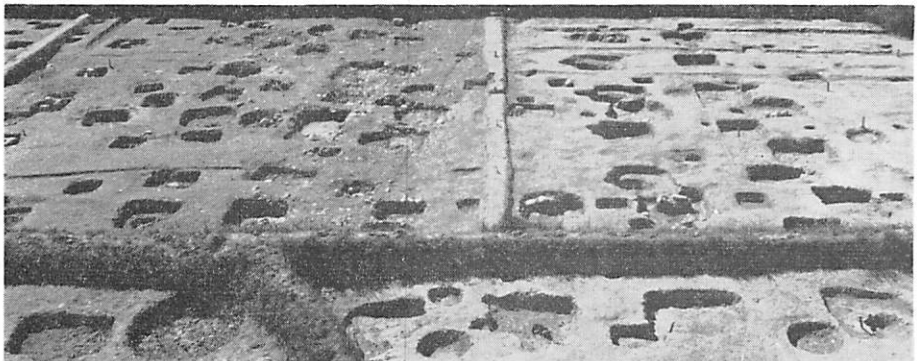
西棟 5 間 × 4 間（柱間桁行各 2.1 m、梁行各 1.5 m）南北廂付建物 S B 1085（b）の期のもかもしれない。

**c 期** K 地区の東部に南北棟 11 間 × 2 間（柱間桁行各 2.85 m、梁行各 3 m）の建物 S B 960 がある。

**d 期** 東西棟 5 間 × 2 間（柱間桁行 2.4 m、梁行 2.7 m）建物 S B 790 はこの期に属する。

**e 期** S B 1000 南半に重なる東西棟 6 間以上 × 3 間（柱間桁行各 3 m、梁行各 2.85 m）南廂付建物 S B 1015 がある。

**f 期** F 地区のほぼ中央で、南北棟 7 間 × 2 間（柱間各 2.4 m）建物 S B 1055 を検出した。この建物の北第



第 3 図 S B 1000 付近遺構状況



第4図 第13次調査地域実測図

6柱列の中央より小柱穴があり、間仕切りがあつたものと思われる。この間仕切りまでの5間の部分には、西に3m離れて小柱穴が並び、西廂、目隠などの存在も考えられる。このSB1055の北2mに東西棟4間以上×3間(柱間各3.85m)南廂付建物SB1135がある。桁行梁行ともに2間の建物SB830と南北柵SA950もこの期のものである。この期の遺構は方位が北で西にふれる傾向がある。

第13次調査地域はいずれも第2次内裏内郭の北に位置し、第10・11次調査地域とともに内裏に付属する部分でおそらく平安宮の華芳坊・桂芳坊の前身的な地区と推定される。東端で検出された築地SC705は現地形からみて、第2次内裏外郭の東面築地とみられる。

発見された遺物で最も著しいものは、東地区のSK830から出土した年代の推定される一括遺物である。この土壙は方約4m、深さ2.3mで、底に厚さ25cmの遺物の堆積があつた。この堆積には本年報で別に述べた1869点の木筒とともに、多量の土器類、木器類、繊維製品、瓦類、自然遺物などがあつた。この土壙は、おそらく短期間のごみ捨て穴らしく、埋没の年時は木筒の年号記載から天平19年8月をあまりへだたらないと推定される。土器類は土師器、須恵器が主で、三彩釉小形葉壺蓋が一点ある。土師器、須恵器には墨書のあるものが十数点あり、土馬が一点出土している。木製品には糸巻、紡錘車、火鑽臼、杓子、箸、曲物容器、漆器片や人形、桧扇など、繊維製品には平絹断片、麻繩があり、さらには、蓆や籠の断片、桧皮なども検出されている。自然遺物には栗、胡桃、桃、瓜などの種子類、木の枝や葉があつた。同じく木筒の出土をみたSK870は東西・南北ともに5mほどの

不整形なもので深さは1.3mと浅く、遺物保存状況は良くなかったが、土器・瓦類のほかに漆冠断片、蒭片などを検出した。この土壙付近の整地層中から、緑釉平瓦片が1枚分出土している。その他の地点からは、多量の瓦・土器類が出土しているが、U地区検出の数点の円硯、鳥形硯、八花縁宝珠硯類や墨書土器が注意される。

#### 第14次・第15次調査

第14次調査は宮跡西南隅の6A・D区で行なった。主な遺構は宮城の南を限る大垣のほかに掘立柱建物5棟、柵2列、井戸2箇所がある。大垣は、南縁が現在の水路で破壊されて不明だが、幅8.5m以上、深さ0.5mの基礎地固めをおこない、その上に幅約3.5mの基底部の築地と北側に約1.5m幅の犬走り部を設けている。築地は削平されていた。この築地の中心から1.5m南に障があるが北縁を調査するとどまつた。



第5図 楡 扇

調査地域の西北部で、側板を立て、内側から枠でとめた方形の井戸を検出した。側板は、各面二枚、上下二段、計16枚からなり、すべて木製の楯を転用したものであつた。木製楯は、下段8枚に用いたものが保存良好でほぼ完形に近く、頂部を山形に作つた長方形の材で、長さ110cm、幅54cm、厚さ3cm、表面中央に鐙がある。表面には、上下に鋸歯文、中央に逆S字形の文様を、黒、丹、白の三色で書いている。上端木口部には、斜めに裏面まで貫通する小孔がほぼ3cm間隔に穿たれている。中央には上下約20cmを置いて2個ずつ小方孔が穿たれており、保持装置をとめる孔とみられる。この楯の寸法・文様・彩色は、延喜軍人司式に記載のある軍人の威儀用の楯と合致している。上端の小孔は馬髪を編著するためのものであろう。裏面に文字・絵画の墨書・線刻をもつものがある。なお、縦に二枚に割れたものを横棧を打ちつけて再使用したらしく、裏面には棧をとめる溝がえぐつてある。この地域の下層には弥生式時代の集落跡があつた。検出された住居跡は18箇所、他に数条の溝や壺棺を埋葬した土壙二箇所などがある。第15次調査は第14次調査地域北方の9A・D区で行ない、西面南門とそれに連なる大垣および建物2棟と柵1列を発見した。西面南門は西半部が現在の道路下になり調査不能だったが、調査した東半部では基壇は削平されており、わずかに地下に掘り込んだ基礎地固めが残存していた。その範囲は南北約32mで、大垣が門の中央にとりつくこと仮定すると東西は約14mとなる。建物は2時期にわたる各1棟で、いずれも門の北約15mの東西柵の北側にあつた。なお、この地区の北半は中世の秋篠川の氾濫で破壊されていた。(本村豪章・鈴木 充)